⊙設定について

上原君と大谷君は大学時代からの友達。現代詩サークルを一緒に作っていた。上原君は就職しているが、大谷君はいまだフリーター。卒業して五年。それでも月一度の定例会だけは大谷君のアパートで続けている。上原君は自分が就職していることに少し後ろめたく、定例会だけは欠かさずでている。大谷君はいまだフリーターであることに少しばかりいらだちを感じ始めている。卒業時はそれでも十人ほどが集まり賑やかだったこの定例会も今はほとんど二人だけ。それでも、どちらもやめようとは言い出せず、続いている。

今夜は、前回の定例会に大谷君が連れてきたバイト先の大学生仲村君が初めて詩を作ってくるというので、久しぶりに何となくテンションが高い。数年ぶりの新しい風。ふだん通りを装っているが、二人ともどこか張り切っている。

⊙言葉について

上原君、仲村君、玲子ちゃんは沖縄人（ウチナーンチュ）。でも、殊更に沖縄口又は沖縄大和口を使用しない。

上原君は、多分親族が集まる場所ではある程度の沖縄口、友人に対しては相手次第、彼自身は日本語と沖縄口をかなり自由に行ったり来たりすることができるテレビとともに育った世代。ただし、目上の人には沖縄口の敬語表現ができず日本語をむしろ使う。大谷君と九年つき合う間に定着した彼らがお互いに一番しっくりいく形、多く文学論を語る中で生まれた形式で会話する。

仲村君は、多分、同級生同士、友人同士では「～だばぁ」とか「～ばーて」とか、若者語尾を使用するような言葉で話している。ただし、年上の人と話す時は「ですます形」で話すので、結果的に標準語に近くなる。玲子ちゃんも仲村君と同様だが、彼女の場合は、ふだんからあまり沖縄口でしゃべるということをしないタイプ。

大谷君は大和人（ヤマトンチュ）だが、東京の人ではないので、彼もまた自分自身の地方の言葉ではない若者口語を使用している。

彼ら自身が道具として選択した言語を使用している、関係の中で居心地のいい言語を使い分けているので、そこにイデオロギーやアイデンティティ論は介入しない。

ただし、脚本を立体化していく作業の中で、上原君、仲村君ににじみ出てくる沖縄的表現があれば、そこに流れる空気をよりリアルなものにするために適宜取り入れる。また、大谷君と三人で話をするときと、二人で話をするときとの、文字化しがたい言語の微妙な変化をすくいあげれるとすてきだ。

ホエタマカイの夜

又は、座蒲団をめぐる詩人たちのブルース

＊少しほろ苦い、けれども明るい音楽が流れている。リフレイン。

舞台は大谷君のアパート。夜。十月の第一木曜日。手作り風のものも含めて詩集が散乱している。部屋の隅にふとん。テレビ、ラジカセ、ギター、本棚代わりのカラーボックスからあふれている本、たばこ、灰皿は空き缶、エトセトラ。恐ろしく散らかっているわけではないが、大谷君がところかまわず詩を書くので、あちこちにゴミかどうか定かでない紙が散らかっている。

＊トイレの流れる音が聞こえる。

大谷君、トイレから出てくる。押し入れの中から『吠える魂詩人の会／定例会』と大書された木綿の幕を出し壁にセットする。かなりぼろくなっている。「詩は俺たちの魂だ！」とか詩の一節とか、走り書きが回りにいっぱいある。大谷君、少し感傷にひたる。部屋を少しかたづけたりする。

吠える。しばらく、一人、吠えている。

上原君、ウーロン茶のペットボトルが入ったコンビニの袋を持って、自分の家のように入ってくる。背広を脱いだり、ネクタイをはずしたりする。よく聞こえないが、普通に話をしている。

＊音楽、だんだん大きくなる。

仲村君、やってくる。二人、「いらしゃい」

仲村君、レポート用紙に書いた詩を二人に見せる。「朗読してくれ」ということになる。

壁際（セット奥）に二人陣取る。

二人に向かって、つまり観客に背を向けて朗読し始めようとするが、照れ臭いので、二人に背を向ける。

仲村君、原稿をしっかり握りしめ、詩を読み始める。

＊同時にふわっと客席明かり消える。音楽一気に盛り上がってからカットアウト。舞台、舞台明かりに。

仲村君の詩の朗読。決して上手ではないが、その気になってくる。時々、ちらっと後ろを気にするが、その気が勝っている。一生懸命で、おかしい。上原君、大谷君、それぞれに体を動かしながら聞いている。大真面目。第三者的にはかなり変。

上原　あ、それだあ……。あぁ、そうそう。
大谷　（聞いてない）カーン、いや、ココーン。うーん。パーン、ああ、パーン！　いや、パーン？
仲村　何ですか？
大谷　いや、耳が「キーン」ってのは、ちょっとな、通俗的っつうか、当たり前すぎるだろう。
仲村　※ああ。
上原　※ちょっと見せて。（原稿を取る）
仲村　はい。
上原　先月の定例会が初参加でしょ。2回目でこれだけ書いてこれるっていうのはちょっと面白いよ。
仲村　いえ……
上原　いや、初めてにしては、ね。初めてでしょ？
仲村　ええ。……その、小学校のころとか除けば。
大谷　除くよ、そういうのは。
仲村　あ、はい。
大谷　ツーン、……耳がツーン、耳がツーンと……
上原　ツーンは鼻でしょう。
大谷　え？
仲村　鼻がツーン、ああ、そうですね。……すごく臭いときとかの。
大谷　（仲村に、少し憮然と）お前はどうなの？　気に入ってるの？
仲村　え？
大谷　キーン。
仲村　ああ、その、※ええ、まあ。
上原　※韻がね、いいよね。
仲村　あ、どうも。……ありがとうございます。
上原　（ひとりごつ）ひゅろろん、どろろん。※うーん、……ひゅろろん、どろろん。……ここ一行あけ。気持ちの空間ね。……うん、ここも一行あけ。……ここんとこは韻が狂っちゃってんだよね。……だから、ここ繰り返しにして……（ぶつぶつと添削中）
仲村　（こっそり、大谷に）※あの、インって何ですか？
大谷　こないだ、説明したろ。
仲村　された気はするんですけど、……それ以上のこと、覚えてなくて。
大谷　同じ音の繰り返しでさ、詩にさ、心地好い響きを与えるんだよな。韻を〝踏む〟っつのね。同じ音じゃなくてもいいんだけど、注目するのは母なる音、母音なんだよ。分かる？　この母音の響きな、分かる？　母音、ボインじゃないんだよ（手振り付き。大谷君だけおかしい）、あ・い・う・え・お……。
仲村　……あの。
大谷　何？
仲村　思い出しました。

大谷　（気をそがれる）ナンダそれ？
仲村　（申しわけなさそうに）思い出しちゃったんで。
大谷　……。
仲村　すいません。
大谷　……もっとす早く思い出すか、とことこん忘れ果てるかどっちかにしろよ。
仲村　すいません。
上原　この「ばーん」って、唐突だよね。
仲村　それは……
上原　何を表現しようとしたの？
仲村　その……
大谷　（少し浮き浮きして）そりゃお前、
上原　（遮って）ビッグバーン！　とか言うなよ。
大谷　（図星）そんなこと言うかよ。
上原　（少し勝ち誇る）じゃ、何でしょう？
大谷　忘れた。（そっぽをむく）
仲村　あの……
上原　僕はね、魂の破裂音と見たんだけど。殺伐とした現代社会の中で蓄積したやり場のない気持ち、魂は台風の目の中だ、青空だけどヘクトパスカルは今なお上昇中なんだよね、今まで押さえてきた魂の薄い膜がはじける、そして「ばーん！」　どちらかといえばソフトな印象の「ひゅろろん」の間で、この「ば」の破裂音が生きてるんだよね。
仲村　※いや、その……。
大谷　（乗り出して）※いや、「ひゅろろん」は不気味だよ。暗闇の中で風にさらされて揺れてるガジュマルの、こう、闇の中で踊ってる感じ？　こりゃ不気味だろう。ソフトっつうのは違うよ、（仲村に）なあ。
仲村　※えっと……。
大谷　※あと、「ばーん」はむしろ内在する希望の象徴だろう。心の中の、こう、希望がさ、かけらがさ、せめぎ合うわけよ、それが自然の大いなる力と融合して、新たなる一体不可分の力を得るんだな。希望が新しい大きな力となって地響きを起こすんだよ、一見当たり前の擬音に込められた、エネルギーをな、俺はな……。
仲村　あの……。
上原　……お前はさ、だから、気楽すぎるんだよ。そんな簡単に希望見つけるなよ。若者は悩んでるんだよ。地響き起こすほどの希望がどこに転がってるか、まず考えろよ。
大谷　俺が若者じゃないような言い方するなよお。
上原　若者かあ？
大谷　（少ししゅんとして）……微妙なところだなあ。
上原　もう三十だろ。
大谷　まだだ。……少し。
上原　お互い様だけどさ。

大谷　だけどなんだよ。
上原　だから気楽すぎるんだよ。
大谷　……お昼休みに屋上で円陣バレーやってるようなサラリーマンには分かんないんだよ。
上原　いつのテレビドラマ観てるんだよ。
大谷　何だよ。
上原　屋上で円陣バレーなんてノスタルジーなんだよ。
大谷　（険悪）やれよ。
上原　（険悪）何だよ。
大谷　（さらに険悪）円陣バレーやれよ、サラリーマンだろ。
上原　（さらに険悪）じゃあ、ピアス開けろよ、鼻にも開けろよ。プー太郎。
大谷　（さらに険悪）おう、開けるよ、へそにも開けるよ、その代わり円陣バレーやれよ。
上原　（さらに険悪）何だよ、それ。
仲村　やめて下さい。
大谷・上原　……。
仲村　やめて下さいよ。
上原　だから。……いいよ。希望だな。
大谷　（まだ険悪）何が。
上原　ばーんだよ。
大谷　……おう。
上原　じゃあ、おそうガジュマルはどう解釈するんだ？
大谷　そりゃ、（右手のグーで左手のパーを殴りながら。パンパンと音がしている）正のエネルギーには常に対抗する負のエネルギーがあるわけで、希望の地響きに対抗する不安のメタファーとしてのガジュマルだ。いや、闇夜に浮かび上がるガジュマルの影、踊るガジュマル、ビジョンがな、（仲村に）なあ。
仲村　※あの……
上原　（大谷に）※じゃあ、「おそわないでくれ」は？
大谷　（すかさず）そうなんだよ。「おそわないでくれ」っていうのは消極的に過ぎるんだよなあ。あふれるエネルギー、希望の地響き「ばーん」のあとで、懇願はないよな。せめて、「おそうな！」とか。……いや、むしろ「おそってくれ！」だな。受けて立つぞ、という自信、力、パワー！　だな。（仲村に）どう？
仲村　（急にふられて戸惑う）え、ええ？
大谷　（勢いよく）おそってくれ。（仲村におそってくれと頼んでいるように見える）
仲村　（少し動揺）あ、ええ。……かまいませんけど。
上原　（不機嫌に）いや、そういう言葉に対する態度は感心しないなあ。
仲村　え？
上原　かまわないって、それはないんじゃない？　だってほら、言葉はね、血のにじむ思いで紡ぎ出すものでしょ、大体、一文字替えると全体が替わるものなんだよ、詩ってのは。……知ってる？　山之口貘なんてさ、一つの詩を完成するのに、原稿用紙こんなに使ったの。校正に校正を重ねてね、それでね、絶対鉛筆使わないの、それ

で、たった一文字間違えても、その原稿用紙はお釈迦なの。だから一つの詩が完成するときにはお釈迦の原稿用紙が百枚も、二百枚もね。（悦に入る）

仲村　……もったいないですね。

上原　そういう話じゃないんだけど。

仲村　でも、鉛筆使ったら……

大谷　だから、そういう話じゃないんだってば。

仲村　……。

大谷　魂なんだよ、詩は。消しゴムで消したりしちゃ、失礼なの。やばいの。

仲村　すいません。

大谷　ま、俺は消すけどね。下書きのときは。

仲村　ああ。

大谷　（からかって、でも真面目に）……その代わり、清書のときはな、夜明け前に起きて、風呂に入って身を清めてから、太陽に向かってメディテーション……瞑想してな、心と体をコスミックな……こう、宇宙的な状態に整えるわけよ、それからおもむろに喜如嘉の滝から汲み取ってきた水で墨を溶く。その中で感情のベクトルを見定め、気合いを込めて鹿毛の筆で……。

仲村　（ちょっとおびえて上原を見る）あの……。

上原　嘘だよ。……だからさ、僕は「おそわないでくれ」っていいと思ってるんだけど。

大谷　（帰ってくる）いや、俺は「おそってくれ」だ。

上原　おそわないでくれだろう。

大谷　いや、おそってくれ、（仲村に）なあ。

上原　おそわないでくれ。

大谷　（仲村に）おそってくれ。

上原　（仲村に）おそわないでくれ。

大谷　（仲村に）おそってくれ。

上原　（仲村に）おそわないでくれ。

大谷　（仲村に）おそってくれ。

上原　（仲村に）おそわないでくれ。

［上原、大谷互いを意識しながらだんだんエスカレートして仲村に詰め寄る。あやしい態勢］

仲村　あ！（玄関を見ている）

［上原、大谷、視線を同時に追う。玲子が立っている。清楚な女子大生風。見てはいけないものを見てしまった、茫然。上原、大谷、あわてて『吠える魂詩人の会／定例会』の幕の前に立って隠す。動揺。仲村、当たり前に立って玄関へ］

仲村　すいません、騒がしくして。

上原・大谷　（愛想笑い）いや、どうも。

玲子　いえ、すいません。こちらこそ。
仲村　うるさかったですか。
玲子　いえ、そんな。
仲村　すいません。（軽くお辞儀）
玲子　（慌ててお辞儀）すいません。……あ、あの、玄関開いてて、声かけてあけるつもりだったんですけど、あの、お取り込み中だったみたいで。
仲村　いえ、そんな大したことは。……えっと、お隣りの方ですよね。
玲子　ええ。……ああ！　こないだはどうも。
仲村　いえいえ。えっと……（何の用で？）
玲子　あ、ああ、あの。……飛んだみたいで、ベランダから、ちゃんととめてあったはずなんですけど。（男三人、何の事かつかみかねている）……あの、洗濯物が、こっちのベランダに。
男三人　ああ。
玲子　その、取らせていただけますか？
仲村　ああ、もちろん（ふっと気がついて大谷を見遣る。大谷うなずく）　どうぞ、散らかってますけど。（その辺のものを少し片ずけてベランダへの道を作る、大谷を見て）あ、すいません。
大谷　いいよ。

[そのころには詩に関するものはあちこちに押し込まれおおざっぱながら隠されている。上原、大谷、それぞれ気のない風を装っている。大谷は詩集の上にすわっている。仲村、何となく案内している]

玲子　すいません、本当に。お邪魔しちゃって……（ベランダの前で立ち止まる）
仲村　（干してあるトランクスを見つけて）あ、すいません（取る）
玲子　（顔に当たりそうになるそれを慌ててよけて）いえ、すいません。
仲村　（顔に当たりそうになったので）うわ、どうも。（大谷に渡す）あの、これ。
大谷　おう。（何となくだっこするように持つ）
玲子　（ベランダをのぞきこんで）あの……。
仲村　はい。
玲子　すいません……
仲村　あ、まだありました？
玲子　いえ、ないんですけど。
仲村　え？
玲子　その、つっかけとか、ぞうりとか、そういうの。
仲村　ああ、すいません。
玲子　いえ、そんな（つもりじゃ）。
仲村　（大谷に）ないんですか？
大谷　（トランクスを上原に渡して玄関に向かいながら）裸足だから、俺。
玲子　（戸惑いつつ）じゃ、私も。

大谷　いや、俺のぞうり、こっちにあるから。
玲子　（ちょっとそれは気持ち悪い気がする）じゃ、私の靴を（玄関に向おうとする）
大谷　あ、そう。（彼女の靴を取る。ちょっとためらってから、仲村に渡す）
仲村　（何で俺に？　と思いつつ、玲子に）どうぞ。
玲子　（ちょっと気まずい）あ、どうも、すいません。

［玲子ベランダに降りる。探している。男三人何となくそっちをうかがう。玲子が小さく「あった！」というのが聞こえる。戻ってくる。三人慌てて定位置に戻る。玲子、洗濯物をかくして持って、片手に靴を持って部屋に戻る］

玲子　どうもありがとうございました。突然お邪魔して、どうも。
仲村　いえ、全然。（大谷に）ねえ。
大谷　おう。
玲子　（去りかけて、立ち止まって）あの……。
仲村　はい。
玲子　いえ。……ありがとうございました。
仲村　（反射的に）あ、またどうぞ。
大谷　（小さな声でぼそっと）馬鹿。
玲子　え？
仲村　あ、すいません。接客のバイト長かったんで。
玲子　ああ。（靴を履いて）あの……。
仲村　はい。
玲子　ドア、しめます？　あけときます？
仲村　ああ（大谷を見る）
大谷　どっちでも。
仲村　どっちでもって……。あ、いいですそのままで。
玲子　じゃ、お邪魔しました。（去る）

［上原、大谷、隠したものを取り出す。幕をセットし直したり、詩集を取り出したり。仲村何となく状況が分からない。みんな黙ったまま］

上原　（不意に）白だった。
大谷　白い草原に薄紫の花だ。
上原　花か？
大谷　（深くうなずく）
仲村　何の話ですか？
上原　風に乗って飛来した一涼の輝きのことだ。
仲村　（よく分からないけど納得して）ああ、詩の話ですか。
上原　春の潮相逐ふうへにおちかかる／落日の　－いま落日の赤きさなかに／われは見つ／かよわき花のすみれぐさひとつ咲けるを／もろげなるうなじ高くかかげ／ちひさきものもほこりかにひとり咲けるを……　《三好達治／すみれぐさ》

大谷　ブラジャー。
仲村　は？
上原　彼女の落とし物。
仲村　見てたんですか！？
大谷　♪どんなに上手にかくしても～。
上原　（無表情に）ホックの部分がのぞいてた。
仲村　それで分かるんですか、花柄とか。
大谷　（きっぱり）分かる。
仲村　すごいですね。
大谷　おう。
仲村　何か、執念みたいなの感じますよ。
大谷　ありがとう。
上原　ほめられてるか？
大谷　ほめられてないのか？
仲村　（上原、大谷に見られて）おまかせします。
大谷　無責任だな。
仲村　どうしてですか？
大谷　ん？　そりゃ……、（無責任な理由を言おうとしている）
仲村　いいんですか？　魂（＝幕や詩集のこと）。お尻の下にひいたりして。
上原　非常事態だから。
仲村　さっきのがですか？
大谷　相手は民間人だ。
上原　一般人。
大谷　そうか。……民間人だったら、俺、軍人だな。
上原　もしくは皇族だね。
大谷　よしてくれ、俺はあんなに不細工じゃない。……あの顔で生まれて、しかも背が十分に伸びなかったのは致命的だったよな。……俺はあいつとだけはエッチしたくない。
上原　向こうだってしたくないよ。
大谷　願ったりかなったりだ。
仲村　どういう話ししてるんですか。
大谷　（ちょっと慌てて）うわっ。俺、ホモじゃないぞ。さっきのはものの例えだ。不細工だからエッチしたくないわけじゃなくて、……例え、相手が、……ジェームス・ディーンでも、エッチはしない。約束する。
上原　だれと？
大谷　ジェームス。
上原　違うよ、約束。
大谷　ああ、今、ここで、……お前らに誓うよ。俺は決して男とはエッチしない。
仲村　……なんか、本当はやりたいみたいに聞こえるんですけど。
大谷　力一杯やりたくない。（一瞬止まる）

上原　どうした？
大谷　……想像した。（うなだれる）……気持ち悪い。
仲村　……今、なんかいろんな人に対して失礼なこと言ってません？
大谷　悪かった。（立ち去ろうとする）
仲村　どこ行くんですか？
大谷　（振り返り、ぼしっと）ステレオだ。（去る）
仲村　（上原に）……？
上原　便所。
仲村　……？
上原　子供のころ言わなかった？　ステレオ、録音する、音を入れる、オトイレ、で便所。
仲村　え、ああ。知りません。初めて聞きました。ああ、なるほど。
上原　今時ああいうこと言うあいつもあいつだけど、……知らないの？　ちょっと辛いなあ。ジェネレーションギャップだねぇ。
仲村　……面白いんですか、本当は。
上原　……いや、面白くないよ。
仲村　よかった。
上原　え？
仲村　いえ、面白くなきゃいけないのかと思って。
上原　ああ。
仲村　詩とかと関係するのかな、とかって。
上原　（いたたまれない）しないよ。
仲村　……※でも。
上原　※やめよう、なかったことにしよう。
仲村　はい。

［沈黙。手持ち無沙汰。トイレの流れる音。大谷戻る。］

上原　（軽く）手洗ったか？
大谷　洗えるか！
仲村・上原　……？
大谷　（ぼそっと）玲子ちゃんのくつに触れたこの手を。
仲村　だれですか？
上原　さっきの、お隣りのわけあり女子大生。
仲村　わけありなんですか？
上原　こんな汚いアパートに住んでんだよ。あんなに清楚なのに。絶対ワンルームに住むべき人がクーラーもないようなちんけなアパートに住んでる。わけありとしか思えない。
仲村　そんな無茶な。……このアパートそんなに汚くないですよ、この部屋が汚いだけで。……あ、すいません。

大谷　いいよ、事実だ。
仲村　それに、隣はクーラーついてますよ。
上原・大谷　嘘！
仲村　ほんとに。
大谷　……何で知ってるんだ？
仲村　いや、こないだ来たとき、帰りに、会いましたから。
上原　何で僕は、……ああ、先に帰ったんだ。
仲村　下で、荷物重そうだったから。あの、あれ、カラーボックスじゃないかな、あの段ボール。それで運んだげたんですけど。
大谷　部屋まで？
仲村　ええ、あ、いや、玄関まで。でも部屋の中ちらっと見えて、同じ間取りがこうも変わるものかと、わ、クーラーまである、って、驚きでした。
上原　（大谷に）そうだよ、一涼の輝きに気を取られて忘れてた。
大谷　「こないだはどうも」
上原　「いえいえ」
上原・大谷　（互いに）なあ。
仲村　何か嫌な空気だなあ。
大谷　（後ろから羽交い締め）卑怯者！
仲村　そんなあ。
上原　はあ。（ため息）
大谷　（手を放して）はあ……。（ため息）
仲村　……だって、そしたらもっと、なんて言うかサービスすればよかったじゃないですか、さっき。絶好のチャンスだったんじゃないですか？　素振りも見せないんだもの。自分、何か悪いことしたみたいじゃないですか。
上原　玲子ちゃんが玲子ちゃんである前に玲子ちゃんは一般人でしょう。
仲村　わかんないなあ。
大谷　俺は力の限りラブラブ光線を送っていた。
仲村　気づきませんでしたよ。
大谷　毎日この壁を通して送っている。
仲村　不気味ですよ。
大谷　（吠える）ウオー！
仲村　な、何ですか？
大谷　吠える魂だ！　ウオーン！
上原　やめとけよ。
大谷　ウオウオーン！　ウオー、ウオーーン！
上原　こりゃ、遠吠えだな。
仲村　（つい）……負け犬の。

［大谷、何をー　仲村、しまったー　上原、あーあ。沈黙。］

大谷　（仲村に勢いよく）ウオーー！
仲村　（逃げながら）……すいません。
大谷　（上原に）ウオーン！
上原　遠吠え。
大谷　（吠え方を変えて）ウオオーー！
上原　（首を横に振る）
大谷　（吠え方を変えて仲村に）ウオン、ウオ、ウオーーン？
仲村　（困って）……さぁ。
大谷　（もうやけだ！）うおぉ★□●△※★⇨●～～ん！！
上原　（いい加減にしろ！）
大谷　（小犬のように小さく、いっそかわいく）……クォン。
上原・仲村　……。
大谷　（自分の世界）……いんだよなあ。玲子ちゃん。何つうの、今時さ、斜めにお辞儀できるお嬢さん、あんまりいないよぉ。こうさ、少ぉし傾斜すんだよね、お辞儀のとき。（やって見せる）な、これが凡人のお辞儀。で、これが玲子ちゃん。違うだろお、品があるだろお。……時折さ、こう、風向きがいいとき？　流れてくるんだよ、ドリカムとか、ユーミンとか。最近はエンヤとかさ。……美しいだろお。とても運がいいときには、鼻唄付きで聞こえるんだよなあ。……それでさ、洗濯機がさ、全自動なんだよ。こうさ、音が静かなんだよなあ。やっぱ、品のよい人というのは、静かなんだなあ。それで、色柄ものとそうじゃないのとか、ちゃんと分けるんだよなあ、で、干すときは、こう、しわにならないように、パンパンっとかやるんだよなあ。
上原　（仲村に）……僕はまあ、ほら、ふざけ半分で天使の玲子ちゃん、とか言ってるだけだけど、こいつは隣にいる分だんだん夢と現実が交錯し始めてんだなあ。半年たつからなあ。黒猫に乗って天使が隣に舞い降りてから。
仲村　黒猫？
上原　ヤマト。
仲村　ああ。……冷静ですね。
上原　僕はね。
仲村　安心しました。……あ、あと、さっき言いそびれたんですけど、その、玲子……ちゃん？　知ってますよ。
大谷　何を？
仲村　詩。
上原・大谷　え？
仲村　時々聞こえるんですって。詩の朗読が。で、なんなのかなあ、って。
大谷　それで？
仲村　現代詩？　を書いてるんですって言っときました。

［沈黙］

大谷　（仲村に勢いよく）ウオーー！
仲村　（逃げながら）……すいません。
大谷　（上原に）ウオーン！
上原　遠吠え。
大谷　（吠え方を変えて）ウオオーー！
上原　（首を横に振る）
大谷　（吠え方を変えて仲村に）ウオン、ウオ、ウオーーン？
仲村　困って）……さぁ。
大谷　（もうやけだ！）うおぉ★□●△※★⇨●～～ん！！
上原　（いい加減にしろ！）
大谷　（小犬のように小さく、いっそかわいく）……クォン。
上原・仲村　……。
大谷　（自分の世界）……いんだよなあ。玲子ちゃん。何つうの、今時さ、斜めにお辞儀できるお嬢さん、あんまりいないよぉ。こうさ、少ぉし傾斜すんだよね、お辞儀のとき。（やって見せる）な、これが凡人のお辞儀。で、これが玲子ちゃん。違うだろお、品があるだろお。……時折さ、こう、風向きがいいとき？　流れてくるんだよ、ドリカムとか、ユーミンとか。最近はエンヤとかさ。……美しいだろお。とても運がいいときには、鼻唄付きで聞こえるんだよなあ。……それでさ、洗濯機がさ、全自動なんだよ。こうさ、音が静かなんだよなあ。やっぱ、品のよい人というのは、静かなんだなあ。それで、色柄ものとそうじゃないのとか、ちゃんと分けるんだよなあ、で、干すときは、こう、しわにならないように、パンパンっとかやるんだよなあ。
上原　（仲村に）……僕はまあ、ほら、ふざけ半分で天使の玲子ちゃん、とか言ってるだけだけど、こいつは隣にいる分だんだん夢と現実が交錯し始めてんだなあ。半年たつからなあ。黒猫に乗って天使が隣に舞い降りてから。
仲村　黒猫？
上原　ヤマト。
仲村　ああ。……冷静ですね。
上原　僕はね。
仲村　安心しました。……あ、あと、さっき言いそびれたんですけど、その、玲子……ちゃん？　知ってますよ。
大谷　何を？
仲村　詩。
上原・大谷　え？
仲村　時々聞こえるんですって。詩の朗読が。で、なんなのかなあ、って。
大谷　それで？
仲村　現代詩？　を書いてるんですって言っときました。

［沈黙］

仲村　（あわてて）だって、鼻唄聞こえるんだったら、こっちの音だって向こうに聞こえますよ。
上原　……もっともだな。
大谷　……終わったな。
上原　始まってないだろ。
大谷　所詮、俺は。（やけ気味に）詩人で、無職で、クサレナイチャーだ。
仲村　（諭して）大谷さん。
上原　（仲村に）何？
仲村　いや、バイト先で……。
大谷　（やおら立ち上がり）……俺、ちょっと酒買ってくる。（上原を見る）
上原　ああ。（財布から二千円出して渡す）
大谷　じゃ。（回りをちょっと捜して、鍵とヘルメットを手にして去ろうとする。）
仲村　（大谷に）あ、あの。
大谷　（哀愁の影）……チャオ。（ドア閉まる）
仲村　（見送って。上原に）あの……。
上原　大丈夫だよ。
仲村　そうですか？
上原　大人なんだから。……一応。
仲村　一応。
上原　一応ね。

*四記：腐った肉塊の人間。まともに言うと結構きつい悪口。

［しばし沈黙。スクーターのエンジンがかかり去っていく音］

上原　バイト先で何？
仲村　え？
上原　ほら、さっき。
仲村　……ああ。何て言うか……。
上原　何かやったの？
仲村　いや、っていうか、自分一回飲みに行ってずいぶんからまれて……。
上原　悪かったなあ。
仲村　自分、接客の方でしたけど、大谷さん裏ですから、おやじ多くて……。なんて言うか、ばりばりに、その……。
上原　……沖縄ワールドだろ。
仲村　ああ、そんなこと言ってました。……自分、なんか、よく分かんないんですけど。疎外感？　あるらしくて。……大谷さん、あんまり愛想がよくないって言うか……。あ、すいません。
上原　……あれの愛敬はなあ、分かるまでに時間かかるから。
仲村　何て言うか、おやじ相手には通じないみたいで……。
上原　通じないだろうなぁ。
仲村　はい。

上原　……ダイビングとかの海系じゃなくて、結婚してなくて、就職もしてなくて、ここにいるとね、面倒みたいだよ、ナイチャーは。
仲村　はぁ。
上原　ほら、大人はね、分類したがるの。自分の分かりやすいのがいいの。……理解は誤解なんだよね。
仲村　はぁ……。
上原　あいつはね、分類されたくないの。
仲村　はい。
上原　ね。
仲村　……え？　（おしまいですか？）
上原　……僕もやだけどね。
仲村　え？
上原　分類されたくないねぇ。
仲村　はあ。
上原　そういうことだよ。
仲村　え？
上原　……大人になれば分かるよ。
仲村　はあ。
上原　……ねえ、なんで？
仲村　はい？
上原　普通、来ないでしょ。詩とか言われても。いや、こないだ初めて来たときから気になってたんだけど。……ほら、追求してさ、やっぱり間違った場所に来たんだって認識されちゃったら元も子もないから、どうも聞きそびれちゃったんだよね。……何で？
仲村　なんでですか？
上原　え？
仲村　何で民間人、ん？　……一般人には隠すんですか？
上原　変だと思われるだろう。いいワカモンが詩を書いてるなんて。
仲村　そうかな。
上原　そっちだって、今日は現代詩の定例会に行くんだ！　『吠える魂詩人の会』に行くのです！　ってみんなに言ってきたか？
仲村　いえ。
上原　だろ？
仲村　でもそれは聞かれなかったからで、聞かれたらそう言いますよ。
上原　そうか？
仲村　ええ、……宣伝カーに乗ってスピーカーで町中の人に伝えたい！　とまでは思いませんけど。
上原　……。
仲村　（傷つけたかと不安になって）あ、スピーカーで言ったっていいですよ、町中の人に。

＊内地の人、沖縄以外の日本人

上原　いや、いいよ。
仲村　……うそつきました。
上原　え？
仲村　やっぱり、ちょっと照れ臭いですよね。
上原　ああ。
仲村　スピーカーはなあ……。
上原　（ちょっとくだける）変わった人だねえ。
仲村　そんなことないです。

［隣から音楽、エンヤの曲流れてくる。どうやら風向きが良いらしい］

仲村　あ……。
上原　だね。

［二人、何となく集中］

仲村　（音楽に耳をすましながら）なんか、ちょっといけないことしてるような気がしますね……。
上原　そこがいいんだよ。
仲村　そういうもんですか。
上原　大人になればわかるよ。
仲村　はあ……。

［音楽美しく流れている。二人、沈黙。その辺の詩集をめくったり］

上原　……僕もあいつもね、同じ失敗してるの。僕は中二のときで、あいつは高一だったかな。ラブレター出したんだよね。詩で。
仲村　うわ、それやば……。
上原　そう、やばかったの。まだ世間を知らなかったからねえ。今思うと、詩そのものの出来も決して良くなかった……、作品としてね。……で、僕はその女の子の周辺グループにくすくす笑われるだけで、だけっても辛かったんだけど、まあそれだけですんだけど、あいつは悪いのに当たって、廊下に張り出されちゃったんだって。それで学年中に知れ渡って、その上国語の先生が変な茶目っ気だして赤ペン入れて返したんだよね。
仲村　きつい。
上原　きつかったの。でさ、あいつ卒業するまで、あだ名がチスト。
仲村　チスト？
上原　ロマンチスト。
仲村　ああ。
上原　だったんだって。とにかくどっちもそれぞれ別の場所でね、詩が好きだとか詩を

書いてるとか、男の子には許されないんだ、って隠れ癖がついてたの。お昼休みにはちゃんとサッカーとかバレーボールとか、参加しましょってね。で、大学で友達になってさ、何となく。国文だったから、ほら、回りもそう言うのにキャパ広めでしょ。で、お互い気もゆるんでたし。あれの部屋に、……もっと狭かったんだけどね、前は。……そこに遊びに行ってね、本棚に朔ちゃん見つけてね、

仲村　朔ちゃん？

上原　ああ、萩原朔太郎。知らない？　月に吠えるとか。

仲村　ああ、聞いたことあるような、……ないような。

上原　（そういえば）こないだ貸さなかったっけ？　詩集。

仲村　え？　あ、ああ。（カバンの中から文庫本を出す）ぅわ、萩原さんだ。……すいません。

上原　いいよ。それで一気に詩の話になってね。いや、最初は探りあいみたいな感じだったんだけど、話だすともう止まらなくて。……二晩泊まったんだよ、あん時。

仲村　二晩ですか。

上原　うん。何か渇望してたの、そういう会話。長い沈黙の歳月の後に現れた一条の光を引き寄せずにいられなかった。

仲村　詩的ですね。

上原　……まあね。

仲村　（えっと）……。

上原　それで、何かさ、逆療法って言うの？　俺たちは沈黙しすぎてたってことになって、胸を張って言おうじゃないか「俺たちは詩人だ！」「そうだ、詩は、魂の叫びだぁ！」ってことになってね。結構勇気いったんだけど、作ったの、サークル。ぼちぼち人入ってね。ほら、詩集作ったりしてたんだけどね。（何となく回りの手作り詩集をぱらぱらめくる）でも、どうしても下の学年は定着しなかったから、僕たちの卒業とともにおしまい。でも悲しいから、せめて定例会だけはやろうって、ね、毎月第一木曜日。

仲村　……その話だと、やっぱり隠す必要ないことになりません？

上原　いや、それで、社会に出るとやっぱりね、又、みんなと同じがよくなるんだよ、世間が。……中高生のころって、みんなと一緒じゃないとまずかったでしょ。やんわり。みんなが見てるテレビ番組は見とかないと話ができないとか、好きなアーティストとかだって、ちょっとずれるのはカッコよくてもさ、ビバルディはまずいだろ、って感じ。

仲村　ビバ……？

上原　……いいよ。それで、大学入って、結構そういうの自由になって楽になって、何でもできるような気持ちになったりして、だから俺たちは詩人だ！　とか言えたんだけど、卒業しちゃうとね、葵のモンドコロなくした感じだなあ。

仲村　え？

上原　ああ……、ほら、黄門様。

仲村　え？

上原　（芝居がかって）ここにおわすをどなたと心得る、頭が高い、控え、控え～！

仲村　（乗って）はは～。
上原　学生さんだぞ～。（元に戻る）……だから、……それをね。
仲村　モンドコロ、葵の。
上原　気がついたらなくしちゃってたんだよね。……追い打ちかけて人減ってくし……。
　ああ、この定例会ね、卒業後の、十人ぐらいいたんだよ、最初のころ。
仲村　十人ここにですか？
上原　いや、居酒屋とかでね、最初のころは。
仲村　へー。（幕をさして）これ、はったんですか。
上原　……最初のころはね。……最初のころはね、だんだん遠のいてく奴らに腹立てたりしてたんだけどね、……僕もね、本当のところ、最近きつくなってててね。仕事、だんだん忙しくなるしね。営業で頭下げてる僕と、青春の叫びをつづる僕と、日々折り合いがつかなくなっててさあ。つづれなくてさあ。結構月一回ここに来るのがうっとおしいんだよね。遠のいていく人々とともに僕の夢も青春も遠のいていったねえ。……文学賞とか、詩集の出版とか。……でも、来ないと、ほら、何か裏切るみたいでね。あいつは、いまだに就職もしないで、なんていうの、頑張ってるわけだから。
仲村　……。
上原　……貘ちゃん、ああ山之口貘っていてね、有名な詩人なんだけど、……知ってる？
仲村　えっと……
上原　あ、ほら、消しゴム使わない人。
仲村　ああ、原稿用紙捨てる人。
上原　……厳密にいうとね、推敲で没になったのはとっとくんだよね。それで、書き間違えたのとかは、捨てちゃうか、娘さんの落書き帳になったんだよね。
仲村　知ってるんですか？
上原　何？
仲村　その、……娘さん。
上原　知るわけないだろ。
仲村　じゃ……？
上原　……詩人って、詩集だけ出してると思ってる？
仲村　えっと……。
上原　詩ってね、食えないのよ。だから、随筆書いたり、小説書いたりするんだよね。、まあさ、それぞれだけどね。有名になれば解説本とか伝記とか出たりもするし……。
仲村　ああ。
上原　何だっけ？
仲村　え？
上原　何の話だった？　そう。あ、沖縄の人なんだけどね。
仲村　は？
上原　だから、山之口貘。
仲村　ああ。
上原　でね、僕はすっごい好きな詩人なんだけどさ、……貧乏じゃなきゃ良い作品なん

かできないよってなこと言ってんの。……知ってる？　座蒲団。

仲村　座布団ですか？（知ってますけどもちろん）

上原　知らないよねえ。

仲村　いえ……（知ってます）

上原　土の上には床がある／床の上には畳がある／畳の上にあるのが座蒲団でその上にあるのが楽という／楽の上にはなんにもないのであろうか／どうぞおしきなさいとすすめられて／楽にすわったさびしさよ／土の世界をはるかにみおろしているように／住み慣れぬ世界がさびしいよ　《山之口獏／座蒲団》

ってね。……傾倒するんだよね、学生のころは。座蒲団になんか座るもんかって。ぼろ一枚まとえればいい、詩に没頭したい、……でも親の泣く顔は見たくない。僕は後者をとったんだよね。僕は、……敗北しているねえ。だからさ、終身雇用にあぐらを書いて詩を作るなんてさ、腹筋しながら背筋するみたいなモンなの。……分かる？

仲村　はあ。

上原　できないでしょ？

仲村　え？

上原　腹筋しながら背筋。

仲村　……えっと（ちょっとやってみようとする。変な格好になる）

上原　無理なの。

仲村　（あきらめて）そうですね。……でも。

上原　何？

仲村　いや、いいです。

上原　何だよ。

仲村　……いや、最近は、かたたたきとか、リス……トラとか？　……終身雇用ってなんか幻じゃないですか。

上原　だから？

仲村　だから、いつ首切られるかわかんないんですから、安心してくださいよ。

上原　……そりゃ不安だよ。

仲村　あ、だから、その、詩人として。

上原　あのね。たとえ終身雇用が幻想でもね、明日肩たたかれるかもしれなくてもね、一度その幻想にすがったことがね、なんか、前科一犯って感じなの。まじめにお勤め、あ、服役ね、やったって世間からは後ろ指指されちゃうの、前科一犯は消えないのよ。心のシコリっつうかね。……あー僕なんでこんなにしゃべってるのかなあ、君と会うの二回目なのにね。……どっかでね、そっちがね、ココはまってくれたら、僕、ここに来なくてよくなるかなあって期待してたよ。

仲村　……ずるいですね。

上原　ん？

仲村　ずるいですよ。

上原　ん、ずるいね。……座布団に座ってぬくぬくして、……ずるいね。もうやめちゃえ、って気分だね。（何気なく原稿を手に取る）ひゅろろんひゅろろんひゅろろん

ろんひゅーろろろんろん……。

仲村　え？

上原　（突然、ちょっと叫ぶみたいに）ばーん！（後ろに倒れる、撃たれたみたいに。仰向けに寝て伸びをする）ふあーあ……久しぶりに思い出話したらなんか疲れちゃったなあ。ばーん！　ばーん！

仲村　折れたんです。

上原　何？

仲村　ばーん。　……その、こないだとにかく一つ書いてこいって言われたじゃないですか。いろいろ、なんかアドバイス？　とかもしてもらったけど、なんか、帰ったらほとんど全部忘れてて、全然わからなかったんで、ちょっと放り出してたんですけど、……台風来て、ああそういえば自然の力とかリズムとか音とか？　そんなこと言ってたなあと思って、台風ってむちゃくちゃ自然だなあと思って、外に出て、そしたら、なんか、怪獣みたいにガジュマルが揺れてて、ちょっと怖かったんですけど向かい合って立ってみたんです。それで、なんか、生まれて初めて、この音言葉にしたら、アかな、イかな、ウかな、とか考えながら立ってて、結構集中しちゃってて、そしたら「ばーん！」って、枝が折れたんです。それで、結構自分のそばに落ちてきて、かすったりとかして、かなり怖くて……

上原　それで「おそう？」

仲村　はい。ガジュマル怪獣が襲ってくるって感じして……、あ、子供みたいですけど。

上原　それで？

仲村　いや、それだけなんですけど。二時間ぐらいそこに立ってました。結構初めての体験でおもしろかったです。……で、難しいことわかんないから、なんか、そのまんま書いたんですけど。

上原　へー。

仲村　……だから、やっぱり、さっき、どっちでもって言ったけど、「おそわないでくれ」ですね。怖かったですから。

上原　へー。

仲村　……ばかみたいです？

上原　んにゃ。……なんか、いい子だね。……なんか、初夏の風みたいだ、お日様みたいだ、……夏みかんのヘタみたいだ。

仲村　ほめてます？

上原　うん。全身全霊ほめてる。

仲村　……わからない。

上原　……でさ。何で？

仲村　え？

上原　だから、何でここに来たの？　しかもちゃんと体張って宿題もやってさあ。なんかさっきうまくごまかされちゃったから。

仲村　ああ、その話ですか。その……、

［スクーターの音。コンビニの袋を下げて、大谷帰ってくる］

大谷　おう。なあ、やっぱりおそってくれ。
上原　目覚めたか。
大谷　違うよ、こう夜風に吹かれながらずっと気になってさ、やっぱりおそってくれだよ、ガジュマルは。（仲村に）なあ。
仲村　えっと。
上原　その件は解決済みなの。（仲村に）なあ。
仲村　はい。
大谷　何だ、ちょっと見ない間に親交を深めてるなあ。で、どっちに？
上原　そりゃ……。
仲村　おそわないでほしいなって。
大谷　ええ！　おそってくれよお。（哀願）
仲村　いえ、おそわないで下さい。
大谷　おそってくれ。
仲村　おそわないでくれ。
大谷　おそってくれ。
仲村　おそわないでくれ。
上原　……なんか、デジャブだな。（何気なく玄関を見る）
玲子　（玄関に立っている）すいません。
男三人　あ、どうも。
玲子　あの、落としました？　鍵。ちょっと出ようかと思ったら玄関のところにあったんで。あの、……違います？
大谷　はい。……あ、いえ、違いません。
上原　何で気づかないんだよ。
大谷　おそってくれで頭いっぱいだったから。
玲子　は？
仲村　あの。
玲子　はい。
仲村　あがりません？
上原・大谷　！（とても驚く。一瞬回りの〝魂〟の数々が気になるが、時既におそし）
仲村　散らかってますけど。（大谷に）あ、すいません。
大谷　……おう。（上原に耳打ち）突然の個人プレーだな。
仲村　どうぞ。
玲子　あ、でも。

［上原・大谷、行き掛かり上あたりをかたづけ始める。］

仲村　どうぞどうぞ。せっかくですから。
大谷　（上原に耳打ち）どういうせっかくだ。
上原　（大谷に耳打ち）うれしいんでしょ。

大谷　……。
仲村　大丈夫ですよ、そんなおびえないでくださいよ。
玲子　そんな、すいません。
仲村　ちょうど、そろそろお酒って感じだったんですけど、（大谷に）ねえ。
大谷　おう。
仲村　でもウーロンもありますから、（大谷に）ねえ。
大谷　おう。

［玲子、仲村に促されて上がる。］

玲子　じゃ、お邪魔します。（斜めにお辞儀。もちろん自分の靴はそろえて置く）
大谷　おう。
玲子　（大谷に、ちょっと恐る恐る）あの、これ（鍵を渡す）
大谷　おう。
上原　どうも、ありがとうございます。
玲子　いえ。
仲村　（冷蔵庫に向かいながら、玲子に）何飲みます？　（大谷に）あ、コーラもあったんですっけ？
大谷　おう。
玲子　……じゃ、水割りを。
上原　コーラの？
玲子　いえ、……お酒の。
大谷　馬鹿。
上原　（玲子に）すいません。
玲子　あ、すいません。

［グラス、氷、酒、もろもろ何となく落ち着かないまま準備される。大谷の買ってきた袋からスナック菓子なども出される。コアラのマーチが入っている。］

仲村　こういう趣味なんですか？
大谷　別にコアラが好きで買ってるわけじゃない。味が好きなんだよ。
仲村　へー。
玲子　あ、私も好きですよ。
大谷　おう。

［ちょっと気まずい沈黙。］

仲村　あ、自分仲村です。仲村真。大谷さんとバイト先が一緒で、……あ、自分はもうやめちゃったんですけど。こっち来るの今日でまだ二回目で……。（大谷に）ね。玲子ちゃんは（あ、まずい……）

玲子　え？
上原　（ちょっとあわてて）僕は上原です。こんばんわ。
玲子　こんばんは。

［仲村、上原、大谷を見る。］

大谷　あ、大谷繁盛です。　＊「たに」は沖縄口で「おちんちん」、「まが」は「まぎ」：大きいの変形で、つまり「おちんちん大きい奴」
上原　大きい谷で、訳すと、たにまがー。
大谷　（力一杯上原を殴る）言うか？
上原　……ごめん。習慣で。
大谷　こいつ、この年で名前、亀重っつの。亀が重いって書くの。亀さんって呼んでやって。
上原　言うか？　あやまっただろ。
大谷　上原亀何とかファミリーだもんな。もう、ここんち親戚亀さんだらけ。亀一、亀二、亀三郎、亀千、亀蔵、亀吉……。
上原　お前に知られたのは人生の汚点だったよ。
大谷　その通りだよ、亀さん。（勝ち誇る）
仲村　ええっと……（場を修正しようとして）
大谷　（仲村に）いや、こいつんちの電話番号なくしちゃってよ、調べたんだよ、電話帳。そしたらまあ、ずらあっと亀さんがならんでんの。めでたかったなあ。いや、俺は感動したよ。こりゃあ、絶対他人とは思えないと思ってこいつに聞いたら、案の定、ね。亀さん一族だったんだなあ。＊実際上原亀〇〇一族は存在します。
上原　悪いか。
大谷　いや、めでたいよ。
上原　お前だって、名前、繁る、盛るで、繁盛（はんじょう）だろ。
大谷　めでたいじゃないか。
上原　親は泣いてるぞ、こんな繁盛しない暮らしぶりで。
大谷　俺は心が豊かなんだよ。繁盛してんだよ。
上原　何だよ、タニマガー。
大谷　（負けない）お褒めにいただき幸いです。
上原　名前負けだろ。
大谷　なに！

［仲村、玲子、おかしいけど、笑っていいものかどうか……。大谷・上原、二人の視線に気づく。ばつが悪い］

仲村　……二人とも大人なんですから。
大谷　（反省）おう。
上原　（反省）どうも。
玲子　（とりなして）あ、大浦玲子です。えっと、……よろしくお願いします。

男三人　（ばらばらに）よろしくお願いします。

［間］

仲村　なんか、あらたまっちゃってますね。
玲子　すいません、あの、こういうの、あんまり得意じゃないんで……。
仲村　いえいえ。……とにかく乾杯しましょうか。……じゃ、『吠える魂詩人の会』に。

［上原、大谷、ぎょっとする。仲村ちょっとひるむ］

仲村　（上原、大谷に）もうばれてるんですから、すっかり。
大谷　……おう。
仲村　（玲子に）ねえ。
玲子　はい。……あ、くわしいことは全然分かりませんけど。
仲村　じゃ、『吠える魂詩人の会』に、乾杯！
上原・大谷・玲子　（ばらばらに）乾杯。

［まずは、飲む。つまみをつまんだり。］

玲子　（飲んで、仲村に）あの……。
仲村　はい。
玲子　ちょっと、うすくて。
仲村　え？
玲子　（グラスをさして）これ。
仲村　ああ、はいはい（お酒を足す）
玲子　あ、ありがとうございます。
仲村　いえいえ。
上原　へー、結構強いんだ、玲子ちゃ……さん。
玲子　ええ、まあ。半分ぐらいなら飲めます。
仲村　五分五分？
玲子　いえ、一升瓶の。
男三人　へー！
玲子　父の教育方針が、女の子は、お酒強くなきゃ危ないって。……全然飲まないのが一番いいんだけど、今の時代、そういうわけにはいかないだろうって。だったら、そんじょそこらの男の人より強くないと危険だって。それで、わりと小さいときから鍛えられたんで。
上原　鍛えるって？
玲子　えっと、幼稚園が甘酒で、小学校で酎ハイ系の、あのジュースみたいなの、そのころまでは、まあ、折にふれてでしたけど、あと中学校からは晩酌のビールを毎日飲むようになって、折にふれて食後の島酒も一緒に。

仲村　それで、一升瓶。
玲子　あ、半分ですよ。全部はさすがにちょっと。
大谷　すげえなあ。
上原　なんか、そのお父さん、すごいよねえ。正しいよねえ。正しくて、男の敵だなあ。
玲子　うち、男の兄弟いないですから、多分、本当は晩酌相手がほしかっただけだったんじゃないかって、最近思いますけど。なんか、今思うと、かわいいです。母の手前、屁理屈こねてたんじゃないかって。
上原　家族愛だねえ。
玲子　いえ、そんな。……でも、おかげで一度も飲み会で醜態？　さらしたことないですけど。
男三人　立派！（拍手）
玲子　あ、ありがとうございます。
上原　いやあ、天使は意外にも酒豪だったか。
玲子　え？
仲村　いえいえ。

［なごやか］

上原　（仲村に）ねえ、さっきの続きしてよ。
仲村　何ですか？
上原　なんで『ホエタマカイ』に来たのか。
仲村　え？
大谷　（上原に）馬鹿、油断しすぎだよ。略すなよ。
上原　（ばつが悪い）いや、その、この詩人の会にさ。
玲子　ああ！　吠える魂詩人の会、略すとホエタマカイですねえ。何か、おいしそうですね。……あ、ごめんなさい。
仲村　……けっこう不幸な話ですよ。
大谷　ここに来るのはそんなに不幸か。
仲村　あ、そういう意味じゃなくて。
玲子　（とりつくろおうとして）私、不幸な話好きです
男三人　え？
玲子　あ、そういう意味じゃないんですけど……。
仲村　あの、いいです？
大谷　おう、やってくれ。
仲村　自分、球児だったんですよ。……あ、高校球児。
玲子　すごい。
仲村　いえ。で、甲子園行ったんです。夏の。うちの高校初出場で、異常に盛り上がってて、それで、一回戦、勝ってたんですよね。一点差で。自分、ライトだったんですけど、九回裏ね、これ守れば勝ちって時ね、ランナー出てたんですよ、一、二塁。
上原　何か、この先聞きたくない。

大谷　他人事ながらきりきりするなあ、（胸をさして）この辺が。
仲村　普段ね、あんまり弱気にならないんですよ、野球やってるとき。でも、あのときだけは、心の底から祈ってました。こっちに打つな、打つならよそへ打ってくれって。何か、ほとんど無意識のうちだったんですけど。やっぱ、そういうの良くないんですよね。まっすぐこっちに飛んできて、普通だったら絶対取れてたんですけど、何か、気がついたらボールがボテボテ足もとにあって。すっげえ慌てて。何度もつかみ損ねて、やっと投げたら、暴投で。……ランナー二人かえっちゃいました。
上原　……ずっと体育系うらやましかったけど、考え直すな。
仲村　負けたっていいんだ、なんてやっぱ、うそですから。
大谷　現場の人間の言葉は説得力あるな。
仲村　正面切って責められたりしなかったですけど、それがかえってたまらないって言うか。母校とＰＴＡの皆さんには顔向けできなくなってしまいました。
上原　でも、もう三年前だろ。忘れてるよ、少なくともそっちの半径百メートル以外は。
仲村　……僕、そんなの全然覚えてないもん。
　そのあと、けっこうおっきい台風が来て、負けちゃったのに三日も帰れなくって、くやし涙の台風か、とか言われたときですよ。
上原　あ（覚えてる）！　……なんでもない。
仲村　ね。俺の顔まで覚えちゃいないけど、試合そのものは、今だに甲子園の季節になると話題になったりするんですよ。けっこうきついですよ。
大谷　察するよ。
仲村　三年でしたから、すぐ引退で、受験で、しばらく野球離れてて。そんな頭も良くないですから、とにかく入れる大学入って、それから考えようって思ってて。少年リーグのころから野球馬鹿だったから、ほんと、何か先のこと考えられなくて。で、大学受かって、何かちょっとふっきれたっていうか、やっぱ、野球やろう、もう一回やろうって思い始めたときにね、
玲子　……あの、まだ不幸なお話終わってなかったんですか？
仲村　うん。バイクで事故って足の筋やられたの。で、激しい運動はできませんって。宣告されて。
上原　で？
仲村　で、なんか何にもやる気なくなっちゃいました。適当にバイトして、適当に大学行ってました。あと、パチンコしてました。
大谷　察するよ。
仲村　で、二ヵ月前、突然倒れたんです。
玲子　だれが？
仲村　俺が。……そんなの初めてだったから、けっこうびびって。検査した方がいいってことになって。……自分、絶対なんか不治の病だと思ったんですよ、結核とか。
上原　結核は今治るんだよ。普通。
仲村　え、そうなんですか？
上原・大谷・玲子　（うなずく）
仲村　えっと……。とにかく、自分もう残り少ない命だと思ったら、何しようかな、っ

てのんびりしてらんないなあって思って。迷ってる時間ないんだって結構切羽詰まった気分になって。で、何したらいいんだ？　って結構一生懸命考えて、そしたら、大谷さんが、時々ほのめかしてた詩のこと、何か、ちょっと思い出して。

上原　お前、ほのめかしてたの？　目をつけてかっちりゲットしたんじゃなかったの？　仲村君のこと。

大谷　おう。……まあ、傷は浅い方がいい。

上原　だれの？

大谷　みぃんなの。

仲村　ずっと、気がつかないふりしてたんですけど。自分、体育会系ですから。……詩っていうのはどうも女々しい気がして……。

[上原・大谷、むすっ。玲子、はらはら]

仲村　あ、すいません。で、どうせだったら、自分から一番遠そうなことやるの、面白いかもしれないと思って。……で、来たんです。……今思えば、ヤケッパチですね。

大谷　俺たちやってるこたぁヤケッパチかあ。

仲村　（真面目に）いえ、自分がヤケッパチだったんです。

大谷　……お前、今更なんだけどさ、結果言えよ。検査の。どうもモヤモヤするだろう。

仲村　あ、はい。……ただの貧血でした。先月ホエタマカイに来たときは、まだ検査の結果出てなくて、けっこうはらはらしてたんですけど。

玲子　良かった……。（ちょっと泣き出しそう）

仲村　すいません。何か、ホエタマカイ、湿っぽくしちゃいましたね。

大谷　それ、やめろよ。

仲村　え？

大谷　その、ホエタマカイ。新米が言うと、座りが悪い。

仲村　すいません。けっこう気に入ってるんですけど、……おいしそうで。

大谷　一年続いたら呼ばせてやるよ。

仲村　何か、詩人の発言っぽくないですねえ。

大谷　うるさい。

仲村　……その、自分、ほんと来てよかったですよ。詩を考えるのって、思いの外男っぽいし、体育会系だし。

大谷　体育会系かぁ？

上原　こいつはね。

大谷　ふーん……。（よく分からないけど、まあいいか）

仲村　朔ちゃんとか貘ちゃんとか、何か、詩人さんもフレンドリーな感じだし。

玲子　（仲村に）だれですか、それ？

仲村　いや、俺は本名も覚えてないから。それは（大谷をさして）こっちに聞いてください。

玲子　（大谷を見て、仲村に）えっと……。

仲村　あ、大谷さん。

玲子　あ、はい。大谷さん。
大谷　（照れる）その、まあ、なんだ。

［三人、注目］

大谷　だから……、な。（上原に）タッチ。
上原　何だよ、それ。
玲子　（大谷に）貘ちゃんって、バクのことですか？
大谷　え？
玲子　あの、（ものを食べる仕種）夢を食べる……。
大谷　いや、んっと。山之口貘って、有名なの。
玲子　へえ。
大谷　おう。……一つの詩を書くのにな、こんなに原稿用紙使ったんだよ。一文字間違えても、その原稿用紙お釈迦なの。な。原稿用紙一枚分とかのたった一つの詩を書くのに、百枚二百枚使ってな。

［沈黙。大谷（あ、話題間違えたか？　仲村君には理解してもらえなかった話じゃないか、しまった）と思っている。長い沈黙］

玲子　……すごいですね。
大谷　……おう。
玲子　闘ってるみたいですね。
大谷　（期待）おう。
玲子　なんか、……怖いみたいですよね。一人で、原稿用紙前にして、すっごい集中してて……。きっと近づけないでしょうね。……書き間違いなんて、多分、憎いのかなあ。……許せないっていうか。なんか、分かんないですけど、分かるみたいな気がします。

［大谷・上原、感動。上原、仲村を見る］

仲村　（小さく）……すいません。
玲子　白いワンピースにね、奮発して買って、家でよーく見たら、ちっちゃい染みがあったりして、本当にだれも分からないくらいちっちゃくて、でも、もう絶対許せないんですよ。こんなの売ったお店が許せないとか、気づかなくて買っちゃった自分が許せないとか、そういうんじゃなくて、このワンピースに、私がすっごい気に入ったワンピースに染みがあるっていうのが許せなくて……。だれも気付かなくても、なんか、筋を通したいっていうか。……あ、なんか変な話ししてます？
上原　んにゃ。
玲子　なんか、本になって、活字になって、だあれも元の原稿見ることなんかなくっても、……なんて言うんだろう、こういうの。……あ、すいません。

男三人　え？
玲子　ワンピースなんかと比べちゃいけないですよね。
大谷　いやいや。
上原　どっかのだれかさんにはエコロジー問題にされちゃったから。
仲村（見られて）？
上原　もったいないお化けが出るぞぉ。
仲村（自分のことか）だから、謝ったじゃないですか。
上原（子供あつかい）よしよし。
仲村　なんか嫌な感じ。
上原（さらりと）玲子ちゃん、好きな詩とかある？
玲子（少し困って）……いえ、そういうのは、全然分からなくて。
仲村（味方して）難しいですよねえ。
大谷　難しいってこたないんだよ。
上原（大谷が熱くなるのを避けて）えっと、だからさあ、ほら、歌とかでもいいんだよね。歌詞ってほら、侮れないから。
玲子（明るく）ああ。（真剣に）えっと、そうですねえ……。

［玲子、考える。男三人、それぞれに待つ。もうちょっと答えを待つべきか、別の話題をふるべきか、こんな質問はやばかったか、などと考えている。長ーい沈黙。玲子、考え続けてるのかどうか定かじゃない。男たち、とりあえず、お酒継ぎ足したりしている］

玲子（不意に）山羊が。
男三人（きょとん）山羊？
玲子　ええ。何でしたっけ？
男三人（分からない）……。
玲子　お手紙を、出すんです。あの、ほら、（頼りなげに歌う）♪やぎさんゆうびんっていうの、分かります？
仲村　次何でしたっけ？
玲子　えっと……。
大谷　♪仕方がないからお手紙書いた
全員（それぞれに加わって）♪さっきの手紙のご用事なあに？

［何となくおもしろくなって歌い続ける。その辺のものをドラム代わりにしたり。大谷はギターをつま弾く。最終的に結構聞けるものになっている。とにかく、何度も歌う。しつこく歌う。］

全員（やぎさんゆうびんを熱唱）

用事なあに？♪♪ジャララ～ン（ギターです）

［しばし達成感。余韻。］

仲村　大谷さん、ギター弾けるんですね。
大谷　詩人の必須アイテムだ。
仲村　（感心する）へー。
上原　嘘だよ。
仲村　又ですかぁ？
上原　そう。……まあ、強いて言えばハーモニカ？
仲村　ハーモニカ？
上原　だから、詩人のアイテム。
仲村　ハーモニカですか。
玲子　（上原と仲村が話しているので、大谷に）好きなんです。
大谷　（動揺）……。
上原・仲村　（茫然）……。
玲子　（回りの動揺には気付かず）……理由は分からないんですけど。
仲村　いや、ほら、理由なんて、（上原に）ねえ。
上原　そうそう、（大谷に）なあ。
大谷　（茫然としながら言葉だけに反応して、息の声で上原に）フガ？
玲子　気になってたんですよね。ずっと。
男三人　（息をのむ）……。
玲子　お手紙には、本当は、何て書かれてたんだろうって。
上原・仲村　オテガミ？
玲子　はい、白山羊さんか、黒山羊さんか、最初にお手紙を書いた人、……じゃなくて山羊さんは、そこに何て書いたんだろうって。
大谷　（茫然と）※お手紙……。
仲村　※なんだ……。
上原　（取り繕って）……気になるよねえ、それ。
玲子　気になります？
上原　うん、気になるよ。
仲村　俺も気になります。
玲子　……良かった。
上原　肝心のメッセージが分からないまんまに、それでも人にエンドレスで歌わせる不毛な歌だよなあ、（大谷に）なあ。
大谷　（立ち直ろうとしてる）おう、パワフルに不毛だ。
玲子　でも、好きなんです。
大谷　（立ち直りに失敗）……。
上原・仲村　（好きなんですの響きにびくっとしている）……。
玲子　何か、ロマンチックじゃないですか？

男三人　……。
玲子　私、絶対、この黒山羊さんと白山羊さんってオスとメスだと思うんです。
仲村　オスとメス？
玲子　男と女っていうか……。黒山羊さんが、ラブレター書くんですね、白山羊さんに。……君が好きだよとか、結婚しようよとか、一緒に暮らそうよ、とか。
男三人　はい。
玲子　でも、白山羊さんは食べちゃいますよね。それで、お手紙書くんですよね。何て書いてあったの？　って。
男三人　はい。
玲子　でも、黒山羊さんも食べちゃって、ね。だから、二人はずーっと、手紙を送り合うんですよね。……ずーっと手紙書いて、送って、食べちゃって、又送るんです。分かんないけど送るんです。……分かんないから送るんです。でも、やめないんです。送り続けるんです。……山羊は手紙食べちゃうおばかさんみたいに思われちゃって、でも、私、そんなことないと思います。
大谷　……届かないんだよなぁ、言葉は。
玲子　（きっぱり）送るんです。
大谷・上原　（どきっとする）……え？
玲子　何十回も、何百回も、何千回も、何万回も、送るんです。食べちゃって、分からなくって、でも、送るんです。……それが、白山羊さんと黒山羊さんの愛なんです。白山羊さんと黒山羊さんの仕事で、全部で……。
男三人　……。
玲子　えっと……。その、だから、白山羊さんと黒山羊さんは結局お手紙読めなくって、内容は全然分からなくって、でも、それと、お手紙全然出さないのとは全然違うことですよね。（場をうかがう）
（大谷と上原が何も言わないので）……全然違うよ。
仲村　……良かった。あれ？
玲子　何？
上原　ああ、そう、それで、この歌、何だか好きなんですね、私。（ちょっと笑う）
玲子

［柔らかい沈黙。］

玲子　あ……。
大谷　ん？
玲子　……風。涼しくなりましたね。
上原　ああ、風だね。
玲子　秋って感じですね。
上原　……眠れない季節だなあ。（＊詩を思い出している。生活の柄／山之口獏）
大谷　眠れないなあ、秋は。（　〃　）
玲子　そうですか？
大谷　……不意に冷たい風吹いてさ、タオルケットずり上げんだよ、首まで。……そし

たら足が出ちゃうんだよな。足で又、ずり下げると、今度は首が寒いんだよ。でさ、いろいろやるんだけど、結局丸まって寝るんだよな。丸まると、俺、いないみたいな気分になっちまうんだなぁ。

三人　……。（ちょっとしんみり）

大谷　（立て直して）こっちの秋は短いからなあ。ちょっと油断すると感じ損ねる。

上原　秋かな、と思ってるとあいまいに冬がやってきて、あいまいなまま春にバトンタッチだね。

大谷　あとはひねもすのたりくらりと長ーい夏だな。……それもまた、いいんだけどな。

仲村　大谷さん、北でしたっけ？

上原　（大谷をさえぎって）朝起きるとね、二階が一階になっててね、二階の窓からランドセルしょってスキー履いて学校行くの、途中でね、ナマハゲが包丁持って襲いかかってくるのをかわしながら五時間かけてね、学校までね、あ、あとときどき白熊がね、アザラシねらって……

大谷　俺の田舎どこだよ？　お前が小学校行くときはアンガマ*が襲ってくるのをかわしてたのか？

*八重山の豊年祭で登場する神様の使い。老夫婦のお面をかぶる。そのお面は居酒屋などに飾ってあったりする。

玲子　（きっぱり）アンガマは襲いません。

上原　もっともだ。

仲村　……何の話ですか？

上原　始めた僕も分からなくなった。

大谷　……俺の田舎はなあ、盆地だからさあ、そんなに雪降らないんだよ。雪降らない分、むちゃくちゃ寒いんだよ。……雪が降るときはな、かえってあったかいんだよ。

仲村　へえ。

大谷　ぼたん雪とかさ、ああいうふわふわした雪ってのは、あったかいんだよなあ。

玲子　私、一回だけ、見たことあるんです、雪。

大谷　一回だけ？

玲子　はい、高校のとき、冬休みに。朝起きたら回り全部真っ白で、本当じゃないみたいでした。わあーって外出たかったんですけど、なんか、踏んじゃうのもったいなくって、二十分ぐらい玄関先に立ってて、迷ってて、……風邪ひいちゃいました。

大谷　……♥

玲子　迷った末に、そおっと外に出て、そしたら、雪って、踏むと音がするんですよね。しゃく、しゃく、って。……風吹いて、……もう雪降ってなかったんですけど、風吹いたらさらさらって雪降ってきて、あれ、と思ったら電線の上の雪が落ちてきて。あ、こんなとこにも積もってるんだって思ったら、なんかうれしくなって……。その雪がね、セーターの袖んとこに落ちてきて、あーこん中に理科の教科書で見てたあの六角形とか五角形とかの……

大谷　結晶？

［ここだけ舞台、突如芝居臭く雪が降ってくる。薄桃色の明かり。感動的でかつラブラブな音楽。］

玲子　はい。写真で見たあれが、きれいだなあ、って思ってたのが、今自分のセーターの袖んとこで、水と氷の隙間で、だんだんただの冷たい水になっちゃってるんだけど、今はここで、私には見えないんだけど、あんなきれいな形してるんだなあって、ちょっと感動っていうか、どきどきしました。……そのうち、なんか、まわり中の雪が、その、結晶の形に見えてきて、なんか、もう、ほんとどきどきして……。

大谷　……♥

玲子　そのうちみんな起きてきて、同級生のいとこはつき合ってくれませんでしたけど、小学生がいたんで。……（少し笑って）一緒に雪だるま作ってもらいました。

大谷　……俺んとこはさ、雪だるま作れるような雪降らないの。めったに。さらさらなの。雪はな、飛んでくるんだよ、山から。風吹くとな。……だから、空気がピーンと冷たくて、空なんて黒いぐらいに真っ青で、太陽が白く光ってて、そこにな、雪が飛んでくんだよ。降るみたいに飛ぶんだよな。太陽で、それがきらっきら光ってさあ。

玲子　うわあ。

［ますます盛り上がる音楽と、ラブラブな照明］

仲村　（上原に）消えましょう。

上原　え？　（合点して）よっしゃ。

仲村　（さらりと）ちょっと、缶コーヒー買い行ってきます。

大谷　おう。

仲村　じゃ。（去る）

大谷　おう。……それでな。夜道歩いてるとさあ、ほら、田舎だから、暗いんだよな。それで街燈がたってんの。ぽつっぽつって。街燈のさあ、青白い明かりが、こう、道路を輪っかに照らしててさ、その明かりの中を、なんつうの、雪がな、こう光ってて……。

玲子　きらっきらって……。

大谷　おう。あんまり雪がちっこいからさ、明かり当たってるとこ以外は、雪なんかないみたいで……

玲子　本当じゃないみたいで。

大谷　おう。

上原　（もぞもぞして）ちょっと、その、たばこ買ってくる。

大谷　吸わないだろ、お前。

上原　え？　ああ、その、吸い始めたんだ、最近。

大谷　（あまり関心がない）へー。

上原　（去ろうとする）

大谷　あ！

上原　（どきっとする）……何？

大谷　悪い、俺のも。

上原　あ、はいはい。

大谷　夜道には気をつけろ。
上原　何言ってんだよ。……じゃな。（去る）
大谷　おう。
玲子　いってらっしゃい。
大谷　……♥
玲子　……？
大谷　いや、それで、俺が一番、猛烈に愛してる詩がこれで、……

[お話は続く中、音楽一気に盛り上がってふわっと消える。容暗。同時に外の音。外の明かり。仲村、歩いている。上原、仲村のところにかけよる]

上原　おう。
仲村　あ、お疲れさまでした。
上原　お前、こういうのうまいな。
仲村　いえ。……なんか気持ちいいですねえ。いいことしてくれてやったぞ、って感じで。
上原　うん。気持ちいいな、けっこう。あいつ、無茶苦茶しなきゃいいけど。
仲村　あの薄桃色の空気見る限り大丈夫でしょう。
上原　詩的だね。
仲村　え、ああ、まあ。

[二人、何となく去りがたく、その辺のガードレールにもたれるとか、お話の体制になる。沈黙]

仲村　あ、本（返します？）
上原　持ってていいよ。……あ、あげるよ、それ。
仲村　いいんですか。
上原　ん。今日、……なんか、ありがたかったから。
仲村　じゃ、いただきます。
上原　読めよ、せっかくだから。
仲村　はい。……あの、読んだんですよ。ところどころ。
上原　へー。
仲村　結構感動したんです。
上原　へー。……どこ？
仲村　今日の詩が昨日の詩より良くなったりしないってとこ。
上原　序文だね。
仲村　覚えてるんですか？
上原　うん、朔太郎体験は衝撃的だったからね。
仲村　年老いていくことを成長だなんて言えないだろうって。
上原　「老は成長でもなく退歩でもない。ただ『変化』である。一つの港からほかの港へ、

船が流れていく潮の変化である。然り！　生命はただ変化である。人生のさまざまなる季節につれて、春から夏へ、夏から秋へと、自然の空や、空気や、林やの色が変わってくるように、人の生命もまたいろいろに移ってくる。だれが四季の価値を論じえるか？　春と、夏と、秋と、冬の季節の優劣を評価しえる基準がどこにあるか。」

仲村　で、詩には進歩がなくって、詩人の生涯には成長がなくって、ただ変化するだけなんですよね。

上原　そう、変態するの。青虫から、さなぎになって、蝶々になるの。

仲村　蝶々になったら、青虫の歌は歌えないんですよね。

上原　詩人の生涯は、変化。成長もなく進歩もない。変化あるのみ。

仲村　なんか、へーって思って。あ、もちろん、そんなよくわかんなかったですけど、明日とか明後日に希望あったりするわけじゃなくて、変化の自転車操業か、人生は、なんて。

上原　面白いこと言うね。

仲村　積重ねじゃないってのが新鮮で。ほら、野球とか、体育会系って、努力と根性で、力一杯積重ねですから。……ま、本当は結局才能だよなあって思ったりもしますけど。

上原　うん。

仲村　例えば、死んじゃったりするのも、成長のおしまいって言うか、希望の打ち切りって言うか、そういうんじゃなくて、なんか、……変化だ！　って思ったりして。

上原　……飛ぶね、話。

仲村　……嘘なんです。

上原　え？

仲村　さっきの話。

上原　……あの長い不幸話し全部？

仲村　まさか。そんなにうそつき上手じゃないですよ。

上原　……（何？）

仲村　座布団。

上原　え？

仲村　亀さん……。

上原　上原！

仲村　あ、すいません。……上原さんって、座布団に座ってんですか？　ほんとに。

上原　うん。

仲村　ほんとに？

上原　……うん、座っちゃってるだろ。

仲村　座布団の上には楽があるんでしょ？

上原　ああ。

仲村　楽なんですか？　亀……上原さん。

上原　そういうシンプルな質問苦手だなあ。

仲村　……足。しびれるじゃないですか。どんなに上等座布団に座ってたって。……な

んか、自分たちって、みーんな座布団に座ってる気するんですよね。それでも、足、しびれて、結構じんじん痛かったりして、たまに、痛い！　とかって叫びたくなって、でも、我慢するんだけど、……やっぱり我慢できなくって、叫ぶと、なんか、やっぱり、「なんだ座布団に座ってるくせに」って言われちゃうんですよね。

上原　うん。

仲村　昔の人たちは貧乏だったんだぞ、とか、世界には飢えた子供たちが何万人いるんだぞ、とか言われても、困っちゃうんですよね。……自分の足がしびれてるときに。困っちゃうんだけど、やっぱり自分が間違ってるみたいな気持ちになっちゃうんですよね。

上原　……。

仲村　だって、足はしびれたまんまですから。……自分、全然、よくわかんないけど、上原さんが、敗北してるような気は、しないんですよね。これから敗北するのかもしれないけど。……あ、すいません。

上原　……うん。

仲村　自分、うまく言い返せなかったですけど。「座布団に座ってるくせに」って言う人たちに。時々、とっても戦いたくなるんですけど、戦い方がわからないっていうか、戦う相手がわからないっていうか、叫び方がわからないっていうか、……吠え方、わからないんですよ。

上原　うん。

仲村　ホエタマ……あっと、吠える魂……

上原　いいよ、ホエタマカイで。

仲村　ホエタマカイは、吠えててほしいなあって。

上原　……。

仲村　（少し熱くなって）いいじゃないですか、それで。座布団のどこが悪いんですか、ねえ、亀さん。

上原　……ウサギさん、酔ってる？

仲村　（落ち着いて）いえ、そんなこともないんですけど。

［それぞれの沈黙］

上原　……さっきの。

仲村　はい。

上原　さっきの嘘、何？

仲村　ああ。……もういいです。

上原　気になるでしょう。

［沈黙］

仲村　……検査。

上原　検査？

仲村　……何ともなくなかったんです。
上原　（冗談のつもりで）結核？
仲村　いえ。……こんな風にしてられるのあとせいぜい二ヵ月って言われました。
上原　は？
仲村　今、病院抜け出してきてるんです。
上原　（信じがたい）やめろよ、そういうの。
仲村　本当です。
上原　……展開についてけないんだけど。……台風の中二時間は？
仲村　あれも病院抜け出しました。
上原　そんな無茶苦茶……
仲村　あの時点では、結構ヤケッパチでしたから。
上原　……今は？
仲村　今も結構ヤケッパチですけど、何か、余裕出てきました。

［上原、仲村の頭や肩や背中を結構強くたたく。そのまま仲村を抱きしめる］

上原　……君、なんか天使みたいだな。
仲村　（抱きしめられたまま）……くどいてます？
上原　いや……。
仲村　……ホモだったんですか。……ヤケッパチですけどそれは試す気ないです。すいませんけど。
上原　……詩人と詩人のあいさつだ。心配するな。（抱擁をとく）
仲村　今日、ホモの話多い気しません？
上原　多いね。深層心理かなあ。
仲村　……。おそってくれ、なんですけど、あれやっぱり……。
上原　おそわないでくれじゃないの？
仲村　おそわせてもいいかな、って。今、……あんまり怖くないですから。
上原　フーン。
仲村　（不意に）ウォー！！
上原　（驚いて）何？
仲村　吠えてみようかなと思って。ウォー！！
上原　おい、やめろよ。
仲村　（もっと大きな声で）ウォー！！
上原　おい。
仲村　（ますます）ウォーウォーウォー！！
上原　……ま、いいか。……ウォー！！
仲村　（ちょっと笑う）ウォー！！

［二人、吠え続ける。じゃれてるみたいな、ふざけあってるみたいな、遊んでるみたいな。二人の遠吠えは辺りいっぱいに広がる。幕開けと同じ音楽聞こえてくる。大

きくなる。リフレイン。遠吠え、音楽に重なり幻のように切れ切れに聞こえるが、いつしかそれも消える。明かり、二人を包み込むように容暗。音楽にクロスして『生活の柄』、戦うみたいにカットインする。一瞬、雑音のようになって、あとは『生活の柄』が流れている。]

The End

＊一九七／第一回沖縄市戯曲大賞佳作受賞

登場人物

オオタニシゲモリ（大谷繁盛）　詩を愛する二十八才。フリーター。舞台になるアパートの部屋の主。
文学賞をねらったり詩集の出版を夢見たりしているうち、就職し損ね、いまだフリーター。沖縄に来て九年。

ウエハラカメシゲ（上原亀重）　詩を愛する二十八才。サラリーマン。
大学卒業とともに就職しているが、一浪しているので、就職して四年。大谷君とは大学の同級生。近ごろはワイシャツを着ていてもくつろげるようになった。

オオウラレイコ（大浦玲子）　二十才。女子大生。
大谷君の隣の部屋に半年前に越してきた。とても清楚。

ナカムラマコト（仲村真）　二十一才。大学生。バイト先で大谷君と知り合う。
今風の男の子。ちょっと茶髪だったりとか。